南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡
―ハルベトスワン・テペシ遺跡の第3次調査(2024年)―

下釜　和也　千葉工業大学地球学研究センター　研究員
ウルダー、ジェラール　シャンルウルファ博物館　館長
森脇　涼太　千葉工業大学地球学研究センター　研究員
多田　賢弘　千葉工業大学地球学研究センター　研究員
キュチュクアルスラン、ヌルジャン　千葉工業大学地球学研究センター　研究員
新井　才二　東京大学人文社会系研究科　助教
西秋　良宏　東京大学総合研究博物館　教授

Exploring a Pre-Pottery Neolithic Hill-top Site: The 2024 Investigations at Harbetsuvan Tepesi, Southeastern Anatolia, Turkey

SHIMOGAMA, Kazuya　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
ULUDAĞ, Celal　Director, Şanlıurfa Archaeological Museum
MORIWAKI, Ryota　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
TADA, Toshihiro　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
KÜÇÜKARSLAN, Nurcan　Associate Research, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
ARAI, Saiji　Research Associate, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
NISHIAKI, Yoshihiro　Professor, University Museum, University of Tokyo

1. はじめに

南東アナトリア・シャンルウルファ県を中心とした新石器時代研究プロジェクト、「タシュ・テペレル・プロジェクト(*Taş Tepeler Project*)」によって、初期新石器時代に関する新しい発見が過去数年、相次いでいる。ハルベトスワン・テペシ遺跡(以下、ハルベトスワンと略)の発掘調査と研究は、この研究プロジェクトに参加協力する形で、2022年に千葉工業大学地球学研究センター、東京大学総合研究博物館、ウルファ博物館の共同調査として始まったものである(松井他 2023；西秋他 2024)。私たちの調査は、人類の生業戦略が狩猟採集から農耕牧畜へ転換していく初期新石器時代のアナトリアにおいて文化変化と技術革新、そして地球環境の変化がどのように相関していたのかを明らかにすべく、考古学、物質科学、古環境の学際研究によって追究することを目標としている。とくにギョベックリ・テペ遺跡や最近調査が進むカラハンテペ遺跡に顕著にみられるように、巨大な石柱が屹立する特殊な建築遺構と、人物や動物の彫刻といった豊かなシンボリズムに代表される特異な巨石文化の成立と展開、消滅がその解明の鍵であると考える。

2. 遺跡の概要とこれまでの調査

ハルベトスワン遺跡はシャンルウルファ市から東へ約45 kmの石灰岩丘陵の上に立地し、大型集落遺跡であるカラハンテペからそれほど遠く隔たっていない。ハルベトスワンで以前に緊急試掘調査を実施したトルコ隊は、石柱をもった矩形遺構が出土したことから、ギョベックリ・テペと同時期の宗教遺構と評価し、またカラハンテペに近いがかなり小規模な遺跡であることからみて、カラハンテペの衛星集落であろうと推定した(Çelik 2016; Çelik and Uludağ 2020)。調査概報によれば、トルコ隊が発掘した遺構群は基本的に1つの建築層しか確認されておらず、その絶対年代は測定されていない。出土遺物を基にその年代はPPNB前期と報告されるが、ハルベトスワンにどれくらいの期間、新石器人が居住していたのか、また、彼らの生業形態はどのようなものだったか(定住した狩猟採集民かどうか)、ギョベックリなどと同様に円形の特殊建造物を有する集落の構造がみられるか、本当に宗教遺跡なのか、などといった疑問が残っていた。

2022年以来、私たちは巨石文化の成立から農耕牧畜の開始に至る初期新石器時代の解明を目指して、ハルベトスワンで発掘調査と分析研究を続けている。

2023年までにトルコ隊の発掘区を再発掘しながら、建築遺構の特徴を点検するとともに、関連遺物や年代試料の回収に努めてきた(西秋他 2024)。そのなかで、トルコ隊が発掘した遺構を含め、ハルベトスワンの居住堆積が3つの建築層(時期)に区分できることを明らかにした。しかし、前年度の調査ではこのうち最下層(第3期)の上面、円形にめぐる石壁遺構の一部を確認しただけにとどまり、掘り下げることができなかった。また、上層の第2期と第1期については、これまで調査してきた発掘区ではすでにトルコ隊が遺構群をほぼ完掘していた。そのため、上層の遺物や年代・分析試料を回収するためには、新たに発掘区を設ける必要があった。2024年の調査ではまずは最下層の発掘を最優先の目標とし、さらに前年の発掘区を東方向に拡張して発掘することと合わせて、2024年9月上旬から9月末まで約4週間の日程で発掘調査を実施した(**図1**)。

3. ハルベトスワン最下層の発掘

最下層に到達する前に、去年掘り残していた第2期の矩形遺構の発掘(D6c区)から開始した。そこで、南側の矩形遺構(通称「南部屋」)の砂利敷きの床面下から人骨を発見した(**図2**)。人骨は部屋内の西側と東側にそれぞれ集積するようにして出土した。予備的な観察によれば、西側の人骨は、サイズの大きな長骨と四肢骨、下顎骨、歯数点を含む。それらのうち、前腕から掌・指にかけて、また脛骨から足にかけては解剖学的位置を一部保っていた。頭蓋骨や脊椎骨、肋骨、骨盤などの胴体部位はこれまでのところ見当たらない。おそらく他所で洗骨した後に一部の部位だけを集骨した二次埋葬と推測される。これに対して、50〜60 cmほど離れた東側には小振りの人骨が集中していた。やはり長骨や四肢骨、下顎骨のみで、部位の組成は西側とほぼ共通する。また、人骨群に混じって、同じ堆積土中にはガゼルなど動物骨の破片も散在していたが、これらの動物骨の組成は他の出土地点と大差なく、意図的で特殊な動物埋葬だったとは考えにくい。被葬者の性別や年齢など詳しい形質人類学的分析は次年度に待たねばならないが、予備的な観察では、西側に成人2個体、東側には小児2個体の合計4個体分が含まれるものと考えられる。

第2期の遺構の直下から、第3期に属する円形遺構を検出し所期の目的を達成することができた(**図3**)。人骨が出土した第2期遺構によってその南側は削平されていたが、本来の直径は4.5 mほどであったと推定

図1　ハルベトスワン・テペシ遺跡の発掘区の空撮写真(東から西を望む)。手前から上へE6区、D6d区、D6c区、C6区と並ぶ

図2　第2期の矩形遺構の床下で発見された人骨群

図3　第3期の円形遺構

される。円形にめぐる壁は50 cmにも及ぶ巨礫を基礎に据え、その上に平らな石材を積み重ねてつくる。壁石の一部には漆喰も残っていた。注目されるのは、円形の壁の外周にも巨礫が環状に並べられていたことである。さらに、円形遺構内には巨礫と平石で構築した仕切り壁のような部分が認められた。これらはチャクマックテペでも認められ、ウルファPPNA期（またはPPNB前期との移行段階か）の円形遺構にみられる特徴であった可能性がある。円形遺構の内部に堆積した土層は灰や焦土を含んでおり、生活に伴う堆積層であったと思われる。堆積土中には石灰岩の凹石が置かれており、製粉具、あるいは柱礎として使われた可能性がある。床面堆積の下で石灰岩の岩盤に到達したが、表面には直径10 cm前後の凹穴が数箇所、不規則に穿たれていた。また、岩盤上にある自然の裂け目には、いわゆるテラゾー床が敷かれていた。このように、第3期の円形遺構は、上層の矩形遺構とは形態も構造も堆積状況の点でも異なる遺構であることが明らかになった。

4. 新たな石柱遺構の発見

第1期と第2期の遺物や試料を回収すべく、D6c区の東隣に、D6d区（5 m×4 m）とE6区（5 m×3 m）を設けて発掘を行った。ここでは発掘前に高精度の磁気探査を実施し、D6c区の遺構からの延長とみられる正の反応や、遺構が認められない負の反応（後世のピットと判明）を確認した。発掘の結果、内部に石柱が3本屹立する矩形遺構がみつかった（**図4**）。遺構は2つの発掘区にまたがっており、一部はさらに南に延長するようだが、約4.7 m×4.7 mの正方形に近い遺構プランを有すると推定できる。石柱のうち2本は遺構内空間の北寄りに、幅広の柱面を南向きにして長軸をそろえて並んでいた。残りがよい石柱は高さ約110 cmを測る。これは頂部が欠損していたが、10 mほど離れた地点、遺跡表面でこの欠損部とみられるT字型石柱の断片を発見した。3本目の石柱は小さく、北壁に接して立っていて、他の石柱と対称をなさない。大型の石柱は基底面にほぼ達するまで掘り下げており、その傍らに玄武岩製の磨製石器が置かれていたことから、この遺構の床面に到達したものと判断した。粘土床と思しい残片は確認したが、テラゾー床のような頑丈な敷床はなかった。また遺構内の空間は、第2期の遺構と同様、礫土で充填されていた。遺構から出土する遺物は上の磨製石器を除けば、この充填土から出土したものからなる。この遺構が特殊な用途をもった公共建造物であったかどうかは不明だが、去年調査したC6区の石柱建物と同時で第1期に帰属するものと考えられる。そうすると、集落内に同時に2基（もしくはそれ以上）の石柱建築が建てられていたことになる。

5. まとめ

2024年発掘調査の最大の成果はハルベトスワンが多層遺跡であることを実証し、第3期の円形遺構をほぼ完掘できたことである。放射性炭素による年代測定は現在依頼中だが、第2期が前9千年紀中頃のPPNB前期にあたるので（Shimogama and Nishiaki, in press）、PPNA–PPNB移行期かそれよりも古い段階に相当する可能性もある。また、床下に埋葬された人骨群は、初期新石器時代の埋葬儀礼を考える上で貴重な資料となるだろう。今後、出土遺物の分析や物質科学的な分析を通じて遺跡と遺構の性格、時期変化について多角的に調べるとともに、初期新石器時代の巨石文化の実態を明らかにすべく発掘調査を継続する予定である。

図4　D6d区で発見された石柱遺構（東から西を望む）

本遺跡調査は千葉工業大学地球学研究センターの研究費のほか、日本学術振興会科学研究費補助金・特別推進研究(24H00001、代表：西秋良宏)、同・基盤研究(B)(22H00734)を受けて実施した。調査の実施にあたっては大村幸弘所長と師田清子氏をはじめ中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の皆様から多大なご支援とご協力を賜った。また現地滞在中には、イスタンブル大学のネジュミ・カルル教授、シャンルウルファ文化遺産保護局のラマザン・バイラン局長、シャンルウルファ博物館のムヒッティン・チチェック副館長、査察官を務めたハビベ・ギョージェ氏とオウズハン・ユルドゥルム氏、ハラン大学のメフメト・オナル教授、そして発掘調査に参加した宮井しづか氏(東京大学博士課程)、ハラン大学などの卒業生ら、多くの機関および個人にご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

■参考文献

・Çelik, B. 2016 A Small-Scale Cult Centre in Southeast Turkey: Harbetsuvan Tepesi. *Documenta Praehistorica* XLIII: 421–428.
・Çelik, B., and C. Uludağ 2020 2017 ve 2018 Yılı Harbetsuvan Tepesi Kazı ve Temizlik Çalışması. 41. *Kazı Sonuçları Toplantısı,* 1. *cilt,* pp: 337–356. Ankara, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.
・Özdoğan, E. 2024 Sayburç: A Mid-9th Millennium BC Site in the Foothills of the Eastern Taurus. *Documenta Praehistorica* LI: 2–16.
・Shimogama, K. and Y. Nishiaki (in press) Harbetsuvan Tepesi. In N. Karul, E. Özdoğan, N. Başgelen (eds.), *Neolithic in the Eastern Taurus: New Research*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
・西秋良宏・C. ウルダー・下釜和也・森脇涼太・多田賢弘・佐竹渉・鈴木健太・N. キュチュクアルスラン・新井才二・池山史華 2024「南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡―ハルベトスワン・テペシ遺跡の第2次調査(2023年)」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』18–21頁　日本西アジア考古学会。
・松井孝典・西秋良宏・下釜和也・C. ウルダー・森脇涼太・多田賢弘・鈴木健太・新井才二　2023「南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡―ハルベトスワン・テペシ遺跡の第一次調査(2022年)」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』9–13頁　日本西アジア考古学会。